福井県内科医会学術講演会 20231209；特別講演Ⅰ
＜担癌宿主におけるサルコペニアとその対策～抗炎症に着目した補剤の新知見～＞
演者：三重大学医学部附属病院ゲノム医療部　教授　奥川喜永先生
座長：福井大学学術研究院医学系部門 内科学(２)分野　教授　中本安成

がん患者において低栄養が高頻度で発症し、がん終末期においてはその割合が 8 割を超え、がん関連死亡の 3 割が低栄養に由来する可能性が指摘されています。このなかで特に注目すべきなのが、「がん悪液質」と呼ばれる症候群であり、これは骨格筋量の減少と筋力低下を伴います。これに伴う低栄養は、がんに起因する全身性炎症反応亢進に深く関与していると考えられています。がん患者における全身性炎症反応亢進は、2011 年に報告された「Hallmark of Cancer（がんの特性）」のひとつであり、がんと炎症は密接に結びついています。

2019 年に発表された低栄養の世界的診断基準である Glim 基準においても、全身性炎症反応亢進は病因の一因として位置づけられています。同様に、2023 年 8 月には Asian Working Group for Cachexia（AWGC）から提唱されたアジアの新たな悪液質診断基準においても、CRP（C-反応性蛋白）の高値（≧0.5mg/dL）が明記されています。

本講演では、これまでの研究から担癌宿主における全身性炎症反応亢進が、サルコペニア・フレイルにどのような影響を及ぼすかについて報告されました。また、従来のアプローチとは異なり、抗炎症に焦点を当てた新たな支持療法の可能性についても議論し、これには、LCR（Lymphocyte-C-Reactive Protein Ratio; Okugawa Y, et al. Ann Surg. 272:342,2020）を用いたアプローチを含めて補剤が有望であるとされました。

御講演を通じて、がん患者における低栄養と全身性炎症反応亢進の深い関連性に焦点を当て、その理解を深めることで新たな治療法の開発や患者の生活の質向上に繋がる可能性を示して頂きました。

貴重なご講演を賜りました奥川喜永教授に心より深謝を申し上げます。